志保之里

初二篇 上

僧 5
508
26

宗榾小松國書

○富貴怕見開花言已開則謝適可喜正可懼尓今有方値豊亨便生驕溢喜筵慶賞過飾婚喪伎樂声容沸騰頗動僕器服食珍羃斎整夫充徒富貴謂之不祥宜急懼思何暇誇侈 許台仲 家訓

○或人曰近年四民多ハ困窮して貧窶に迫る者多し其中にも仕官の武家ハ財用不足して艱に徨くたり時の勢ひしかるにやと予曰ク它そ應仁文明の大乱の後武道治教ことごとく廢まりて雖きに

508
126

任せて事とせし力に隨て郡邑を領せし當時く
皆强悍にして戰事にのみ如し世治まる後も凡
俗革らずして六七十年以前まで新地ある士其邑と
剝剝するを殘暴不仁なる所なりし既に冬
月に及へバ家々其民を召て其貢分を訶督するに
民も亦酷戾にして大かた給督に至れども其怠を
所と悟て不諾故を以或ハ木にのぼせ水に入或ハ
縛して雨雪にさらし或ハ妻子と共に酷毒して
悲鳴啼泣の声こへ所々に滿遍勤婁羅のわざ
家々等しかりし或ハ細民の家を破り農夫の

産を尽さしめて貢に充たる故に其入る所今日と
いてきるに其多き事半にも及びなんその時ハ民を
苛斂するをもて武士の常とし效て忌憚す
るもの多く臧逼せざる者とハ僞法師のごとし
と嘲り何れ軍事とうなすべきなど諍ひさて
家門の男女冶容を飾りて衣食亦文華の彩
なし客を饗するにもいと奢侈なるを尚して只氣
力ハはなはだしきを先とせりかゝりし程に農商も其
分に居て驕をなさゞりし治日久しきに至て
従來其祖先の殘心をもて身亡び家絶る

とりて自狼心をもて恩恵と念ひまかすといへども
なほと知らざるが故に只身心ハ安からんことを謀る風
俗年々に驕り荒淫倦怠に財を費して民の
生産を省ざるに及びてハ村民も亦督促の時にのぞ
きに馴れて遊惰閑を好み嫖賭に佚し因循して
己が産業に懈るゆへ時高家貯蓄の好嗜をもて
衣服及び器什に至迄の類を極て行もしくして花
眩き飾に移り論通りとなることを以て
上下財足らず息をかして富人の金を貸して
事を安ずる故に奢る所ハ日に厚く費す所ハ

月々多し責家の徴索さらにしき故に家々典質に
入ること士惣じて義を棄て民も逼迫して遁と
ならざるも数十年来の習俗なることなく却て華
美に流れ旦一太平時静にして人民百余前に信し
物の價一年一年より騰貴し続にて日積累れ
愁ひ街に満ちて其一時一夕ハ故なりならず去年の
冬我府下の諸士年来の貢数去年に減ぜずて
して糴の價往昔に倍して高ししかれバ綿帛も
此時徒に如何しきこと中々なる窮苦往日よりも過て
こまり久しく負りして欠缺せしくにハかてのみ餘あること

いつとも定なくてや嗚呼いかにしゆく度の身ぞ
その虚態とみるにて慕ひたる身の故にくるしく
れ為す穂ふる事のことりして関かるいとみつく毀誉
滅還にあみいろ倚須發語泰同年さくさる年々迄も
て市井れいそうしける何事とう待春と向く老く
みなし給ふハいづも林下原上死土となるべきを名利の
路に馳てあぶなかるせとゆとも終ることに我人同じし恥
つきれあしさに似ぶぞや
○十日ニ畫二一水ヲ五日ニ畫二一石ヲハ能事相促迫ルヲと
不受ケ為ニ紙筆ヲ輙成ス山水ハ張氏 谷ハ志ガ妙處也 和
其ノ観をなすれ至てハまことに良工の手段のこと王献ガ
牛不負ガ蝿ヲ誤ルも却て絵ゆとなる通神の画
聖ならん事と同じかるべきや
○江文蔚ガ蟹賦ハ厳績ガ信ありして知寡きと
鄙ハ謗たる文也
外ニ視ル多ノ足中無シ寸腸ニ口ノ裏ノ雖ノ黄毎ニ失ム塗ヲ
而相ヒ照ス胸中ノ戈ノ甲常ニ聚テ衆ヲ以テ横ノ行セリ
みどころ沙汎郭索衆横行ス宣ニ料身飯五鼎ニ
亨ニラレントハ
世の中ハあしまにすめる蟹なれや横に行ども行かたハなし
後水尾院御製

○簾の角と解に二格あり格物論に簾ハ冬至に角
解ス簾ハ夏至に角解すと云り
○源氏物語にかけじの念仏と云ハ引声の阿弥陀経を
半出り今世浄土宗にて引声のことてとなふるハ
節博士をつけず念仏なり鐘念仏の古へより
伝へて唱るハ弾誦にとこそ
○同じ物語にそこかしこと云るハ山伏のこと
○筌の字ハ歌書にうゑと読り うゑをとるとてウケとも云ハ
誤り歟
○罧ふし 滲ふしと読しとハ柴れを 日本紀の柴とる水訓

庭につけとき篭をとるとぬしはけとこそ細代ハ
あそまれ音便也
○或人問フ源空上人と円光と勅諡ありしハ在世に
念光の号ありし徳輝を万代に表しけ叡慮
とや重諡に東漸大師号を授けさせし仏
法東漸の謂なりと答曰然り但し知恩院再興
唱知識の文に隣西都念西方之勝地とす東山
表東漸之霊地也等云々然バ是東山に教法
を弘めらし徳ありて直に知恩院の寺を称する
なるべし

○又問フ 源空の忌日ハ 天子の綸命に御忌とある
ゆへなくて御此字を呼て他の忌と云給ふや 答
日ク 亦タ然リ 但し御忌の称呼ハ 知恩院一寺に限る
べきなりや 綸旨ハ知恩院のみに授
中世まで知恩院の御忌と称し餘寺のとハ知
恩講と呼しとぞ云々
○又問フ 近世花頂の白誉上人 圓光大師の新傳と述せ 大師行状翼賛五十二
られし中に我 故二位家此御事とも載せられ給ふと拙論
とやまたせられしと 日ク 贈号綸詞傳下巻に云されけれバ
畿内近国の末寺 東国西国の末流聞き及ぶに随ひて

各上洛し慶賀を致す 尾張ノ大納言光友卿ハ殊に
歴代の芳躅を慕ひ給ひて今なほ頼もしき宗門の金湯
みておはし給ふ 大師号此事御随喜のあまり香染を
御影前にて賜らせ給ひけり其外 公家武家士農工商
の事に至るまで 大師と信じ念佛を行ずる者ハ皆随分
の供物を捧て参詣せり 書略
かく記され給ひされバ 二位家御在世の御時御領国ハ更なり
處々れ各所 檀勝地に御寄附の御志も多かりし 殊に蓮社
の宗ハ御造祖以来 御宗仰の御事にて今一しほの御信
心も浅からず 圓頓戒御相承の後ハ御念佛の数もまさりて

きこえさせましける非田邪義日蓮党汚いましめの時
ありし日蓮が邪風とばいづれも今天下に禁ぜられなりし汚
封内一旦がうちにはたちまち邪風と断絶ましましけるとて
御隠居にも仰しとや親しくきこしめし近習の士等に
語られ給ひし

○ちかき年江戸にありし警固放せ舎の比御鐐殿の辺に中間
らしき男給とねだりき老者二人に草履をとらせなどして
銭を乞ひ給ひし其後は真福寺の門前などにても如くせしが
あまれがりておそろしき事などせしけはきて給ふに是は肥後
熊本の士卜喧嘩せし彼家の従者さらわれ主人の事を
つれ話のきこえくて加るわざして此にも外山にたちもられ
をとつゑし至誠天道もあはれとおもひけんさしも
熊本の地にかへり在りところ家を出て入て首尾能主人の
子にしも国に帰り給ひしとぞ今一人の丈年の従者の子にて
侍りしかや幼きなりけれども父にをとらず名を得しさせる
せし街談實を得て候へ給ふ定て国の守にも達して再び仕へ
給はむ武林の家生なれば人たれはかく候べきなれど
其従者が仙をそだて給ひし忠のわざといふもおのづから
来ぬけりすや　癸巳二月　所聞せ

○日置邑に陽岳道心の僧ありこの比笠寺　龍泉寺へまいり

如し給ひなりし二月（キサラギ）の末、坂田辺にありけるにて八九歳ばかり
なるをさなきもの思はしげにて僧の袖をひかへ頼（タノ）みまいらせたきこと
ありと云ふ事（フタコト）と問（ト）へば我（ワレ）母なくなりてことしの忌日もあす
なれど給ふべきたよりをも知らず我（ワレ）は念仏（ネンブツ）申すなれ
ども袖よりあし二十文ばかり取出（トリイダ）して絶えて僧もあはれに
覚えてなほ問ひにてはおもひれまゐらせぬぞいかにや汝が母のぼだいさ
弔はれてかし母ぬしおもて申しいで給へ忌日（イ）にいたるまでなれこの
これにのこる言葉（シナバ）かきあつめてまゐらせて何をかまゐらせてたまはれに
まゐらぬ僧あまりのあはれにわれも覚えずてありて涙をながし
聞かせて問（トフ）に懐中より守（マモリ）のものをとりいだし 此門にて給

されど如何ばかりぬ身は忌日を修せずしてはかなしびかなしきに
戒名ありこれかしこにみさらすれそれにて給ひてうちふし
ぬさらくいさなとらし我（ワガ）帯（アリロ）に鳥目少し有りしと少年に
ありし是（レ）は異人（マトヒト）に得（エ）しものなれにて死ひ墓（ハカ）に手向（タムケ）
たまへとてうけし渡（ワタ）せしといふや我（ワレ）にてなみだにいそでまよひ
給ふべきといふ不足は又我（ガ）志なりとて取出しければ立（ナ）ちゆき
又銭三文僧に与へしそれをもうけさせ給へとて哭（ナキ）しつて
帰りし僧は彼（カレ）が志を庵（イホリ）に帰りて同法と集め
一夜（ヒトヨ）念仏しけるとて何事かこの少年いかなる孫ところ
おもひ給ひけるとぞ 正覚寺の上人堅空説法の時 誓祐寺二月廻向三月九日

つぶさに行ひ自から濁れもせびてうちゑバうれしがる聴衆いずれ
こゝろ時節と濁し笑みかくてあられぬ行ひしてそも
浮世のすがた富且貴き身にハかゝる志もまれなれども
忠孝のまゝやらるゝハきこえ行らず人なれる本石なりんこれ篤
と聞て誠に感ずるものあり此人あらバ何ぞ君に忠し親に孝
せざるべきとひそかす人欲に黷れ我々私利との観念ひそかく
君恩を思ハず親の心にそむき或ハ色に惑ひて身を喪し
財を貪てゆるさず類ひ有ていかにも自省敬言めて道に
かなふべき事なり

○府下光照院四十八夜長行の会に坂東なる某の上人来て
説法せられ日蓮義のひがめる所を細に正しきこえられ
ければ彼党此僧俗いきどほりつけそのまゝ本寺へ訴
此僧ハこれを狂人と呼びなし三月倚の光照院の
門内の松の木に打立てあまたの人に見驚かさ接捨りたりとぞ
正しき邪徒の愚夫愚婦などのせし所と見ゆ嗚呼あさ
ましく浅き事ならずやかくまで彼宗の者どもハ惑へる
ものぞ仏法をかりて徳とのみひき死を希ふこれを紅葉と
いふべきや妖婦のしわざにて笑しく行ふかや

○癸巳正月十三日院御会始

鶯声和琴　院

御製

○うたひし昔その世に琴の妙なる音もきこへぬにやみな春乃宮

中ノ院正二位 通躬

梅の御笠ともぬりで琴に備る琴より妙の次春の宮

武者小路従二位 実陰

ことぶきも御代の備りことに和歌もあふ琴春に宮

此ノ外 略之

○二月中旬 其の町より著しく出火 諸列 松山の城下 松平隠岐守 士庶の家三百余

宇焼失せしとかや死亡もありし人の説なり

○琉球ノ王使入貢昇年午の夏 六月中ニ来着ありて 云云

薩摩ノ中将家を前にしりしも延引ありぬべきよし

関東の令にて 云云

○関東新大納言家将軍の宣下ありし御使 豫（アラカジメ）有司と

定めおかせられし御年寄老中相列事を奉ぜられ其他

水野大監物ら家も織田能登守ら上京の 上使

松平下総守などそれぞれ行向

参向ノ上卿 近衛前ノ摂政家 家熙公

勅使 九條ノ左大将家 師孝卿

德大寺ノ大納言 公全卿

庭田前大納言 重條卿

院使 梅小路前ノ中納言 共方卿

女院使　万里小路ノ宰相　尚房卿

御衣紋ハ高倉前ノ中納言永福ノ卿御身固には土御門ノ

侍従泰連朝臣等下向しける近衛九條ノ両家は

三月九日京を出しけれは又とし年日光ノ例幣使を

六條の宰相有藤卿四月朔ニ京を立て云云

○大猷院の桜さかれ侍りしと見て思ひいづる事ものと

詠しけるうた

散花の名に余をさへ惜みてあられなき此春もはやし

同じころ月のかゝりし東路のかりゆく事ゆかしに

ととひ侍りける

ことしも御さいく世此春のしらさりて思ひぞかなしむ御代ぞ有る

左ゑ頼桜のいろとをしらてされ侍をそえれ

思ひあはれ是花れにさそはれてさそひ春まひら風春を待ぞも

同じ折しも当寺一万日不退轉の念仏回向とて人の

多参りと相しゆゑ一ゑ開白にもまゐりて覚え侍りしに

三十年ゆく春の浪に立そへてし跡も数へられていかにそ

きうしろに悲しく東なる浪友の心へやとて侍り

わらわ春をこそこの老が世に数へて花にちりきそん

正覚寺の上人空堅にて説法ありし聞名欲往生の文

なと語もころよのくらべしとききて御机に書付侍れ

とふまきくなるさるとりわくはし山へをかれそれの雲

○弘法大師玉藻所歸之嶋橡樟蔽日之浦云々指皎やて書キ
給ひしハ讃岐也多度郡屏風浦の事なり萬葉集
にく麿の玉藻吉讃岐國とよみ給ひし橡樟蔽日
なるを成安の注に古記をひいて昔大楠樹ありしなりと
云り是大師降誕の地にして今も五岳山善通寺
誕生院なと号す通範の記にくはし
五岳ハ香色山 筆山 出釈迦山 中山 火上山なり
又仙遊原 熟蓋地 捨身岳等を大師童稚の時
遊戯の地なりとぞや

○咋 左傳に出ッ注に暫也と木玄虚が海賦にも亘てり
暫の字を書けり江文通が上書に蹔の字を書り又白地も同じ
和訓なり

○藻井 綺井 天華板 風俗通ハ天井の事なり火災を恐るゝより名
づけしと云へり然りして災とのがれんとするも愚とこそいはめ

○貴介富家毎に膏粱に飽きて中々に貪饕の藜藿をハ
好みて素味と好み眼金玉の観に厭てハ懸磬の草舎
もあれ竹籬のわびをみて風清をとむとしつゝきまりて之
故に中世以来茶亭のかまへ出て窘民の栖に居りてかす
多しされを数奇の言を李廣が数奇不得封侯より

言葉りかく呼で命蹇の謂也 敕ハ命也 寄ハ嚮也 世の貴くと
誉ぢ富を禄ずる者ハ忌くしくそをよ厭れり
聊て風流のいづれし伴閑素幽栖を清き境界なる
好ゆくれ又ひ驕泰の人もこれを見とおそよんなれに
しかしぶなや

○友の斎弦唐茶を贈りしけりしが其代に

菲薄任傍笑　風流附故人
雖非蒙頂種　猶是建渓春

と書付りしを謝す

花飛圃寂々　臨月一園人
嘆起松風夢　武陵李下春

暮春遊古井荘

山出落霞遠　花生新葉稀
孤村幽径裏　下任蝶双飛

三月盡

南村慣聴数声蛙　東嶺空残一片霞
落紅為[illegible]昨晩林経　可惜三春處々花

○癸巳三月十九日洛下 兼康町 火あり其夜伏見京橋も亦焼ぬ侍
未の刻京師梅町小川西へ入より火出東北の方へ焼行
大内と云にて迫りしかば行幸あらせられて聖護院殿
遷幸ましましける 院々宮々も他所へ御幸行啓有り
しかやされども猶火入り風南より吹て御築地の内
ほかなる子の時ばかりにて火もえひろがりし凡市井七十余町時の
焼亡となりぬ 久我前内府 一條の大政所 徳大寺大納言
家等諸卿 堂上の家数ヶ所延焼とききこえ侍り
此月十六日東都 弓町より火出すて諸大名の家多焼失とぞ

○三井 此三日の夜石松村の稲荷と古渡の新祠假殿に遷し奉
○清須 此七日 此九日 天神丹羽郡より 摂社の近所あり吉見幸和郷に
事を奉じて勤られ侍り 御鍬下諸社の祠官各供奉す
○濃州芥見の清水寺に開谷といふ禅僧願を発し自一字
の大般若経六百巻を書写せし 九十六ヶ月に成りて我同氏重美これを
聞 釈迦并二菩薩及び十六善神の像を描き氏族を勧て
裱背し便彼寺に納む其絹の裏に弟も名を書しりて
六百金軸 二八善神 一歴億萬歳 護国祐民
と書せし是も亦先時のかゝみと思ひ侍り 壬辰十二月 三月うつし
○社毎に紙幣を献ずるは太祭定法とて 紙を疊み目切り垂れ木に挾て立つ

只伊勢二所のミはすかし　天子より献ぜさせ玉ひます
勅幣とよふ六布帛の筥物（ハコモノ）等せられば　大神宮に八座人の私
幣まいらせざる事是にて知るべきなりも
諸社の幣も根本木綿（ユフ）畳（ダヽミ）の遺風なり然るにこれと無絹の
諸人にいたるまで納るゝものゝ俗に御幣（ゴヘイ）と云来由某云へり

○伊勢内宮の月読宮に立たる大杉樹ありしこれ神路山（カミヂヤマ）第一
の古木ときこえし　壬辰八月十八日の暴風に転倒せしそれ
長（サ）二十余丈　素（ス）口みそて六人に可せとぞ幾代（イクヨ）の霜を歴て緑（ミドリ）を
重（カサネ）ねりしされば数（スウ）ありてたふれ給ふぞ　いよいよ大樹これは御神木とも云ひ　其ノ前兆と云ひあへりしとや

○癸巳三月　前将軍家御台所　天英院　従一位に御上階と云々

近衛大閤基熙公の御息女（ムスメ）　延宝七年六月十九日　甲府公へ嫁せ
られ給ひし由　上意同年十二月廿二日御婚礼　上使土井能登守　と云々

同月廿六日　新君　大納言家　御元服

御加冠　彦根中将直該朝臣

御理髪　会津中将正容朝臣

御烏帽子　織田能登守長福

御泔坏（ユスリツキ）　大沢右衛門督基賢

御櫛巾（クシヌグヒ）　長沢壱岐守資親

御盃　代　畠山下総守義寧
中條山城守信詒

御引渡　織田讃岐守信明
御捨土器　横瀬駿河守貞顕
御敵　前田隠岐守玄長
御加　大友因幡守義問
代　前田伊豆守正長
其他有司多略之
尾張水戸紀伊家及諸大名直垂として登城と云云
○新君御元服の時御加冠御理髪の両侯御賀を奉られ
御太刀 延壽 代十五枚　御馬 栗毛 鞍置　御鎧 緋威御兜 白毛　御弓 重籐御 韘共、
御矢二十筋 御箙立　御刀 国吉 代三十枚　御脇指 行平 代百枚
嶋臺 一荘金銀彩色 蓬莱亀松竹梅等
右彦根中将献上
御太刀 備前近景 代百五十貫　御馬 黒毛 鞍置　御腰物 左吉弘 代三十枚
右會津中将献上
御元服ありて後山観武に供奉せしめ常しきます
御太刀 長則 代十五枚　御脇指 正宗 代百五十枚　御馬 鞍置
彦根中将に賜ふ
御刀 守家 代五十枚
會津中将に賜ふ

○四月二日 将軍 宣下

近衛九條御ニ方家及 鷹司殿 庭田殿 梅小路殿 万里ノ小路殿

来臨御ニ衣紋 高倉殿 御ニ身固 土御門家 ありて

年始の御ニてさきも

第てしと云云

新君出御 有て 故実 礼儀 行なハれ給ふ

官人 此中高辻家及少内記縫殿允 二人ハ前御臺所の上階の小使也

高辻少納言

押小路大外記 副使 青木 雅楽頭

壬生ノ官務 副使 結城右衛門ノ尉

告使 粟津治部丞 此下 平田少内記

副使 青木縫殿允

尾張水戸紀伊家并に諸大名登 城御ニ式前々に不異云

堂上家御饗應の大名

勅使 伊藤大和守

仙洞使 女院使 毛利周防守

將軍宣下に依て別に女院使 撫洛弾正守 近衛家ハ中川内膳正

九條家ハ溝口伯耆守

右の外有司多し略之

同廿五日参向の公卿以下大饗 猿楽等有之

開口 近藤

それよりそのあづさ弓の末のもとなびく代に動なくゆひ

の紫の藤波遠く夏かけて松のさかへぞいくよにめでた

かりける時しも

式三番 松竜 風流 高砂 田村 東北 張良 祝言

同廿七日 御近習の式ありし云々太平時節にして 嗣君御代

あらしめす御末ありけるきはなき天下祝して歓び奉る也

〇或人問フ豊前ノ国高良山カウラハ字ノ音セされバ古くより名に字音

を呼ハ如何と曰ク是ハ香春セカハラと訓ず續日本紀ノ承和四年

の條に豊前ノ国田河郡香春三社と云フ是也

〇我国古へたすきひれなどいふものを服せしにたまたまハ中世まで

著袴の時に服せしに一条ノ院御たちまきの時より小袖に

著しましまして古記に見えたり

たすきハ白練綾紋ハ小葵うらハ白き平絹也三幡懸緒れ

ひろさ三寸治承四年東宮ノ安徳御著袴の時著御のたすき

給の人なにによりて例はありて用せられたれども著御ハ

ハなりしと云々　草苅 和言集の中に見へたり
此れハ婦人の肩服なりといへれど　裙帯領巾ハ肩にも掛ると見ゆ
○府城　東照宮の御祭元和五年に初り　後雨に依て延引も
ありしにや久しき事ハ人もよく知れる前々なりしを明暦元年
乙未に霖雨故九月に延しと古き人語り伝ふ　又ハ元禄元年
戊辰　十八日晴て渡りし　同き八年乙亥　十八日快霽にて渡り　共に一日の延引なりし　其乃
雨ふりて晩景にも渡り又ハ雨ふりし山車引そろひて見るも
まれなりし事覚え侍る今年癸巳十六日にハ陰りなから
常楽及び又の御蔵法三問一答の論義なとありし十七日の
暁より雨降りて　一日降り暮し　其夜猶雨なりし
十八日十九日たへまなく頻に雨降りて　卯の花くだしの空
いとゞ寂しかりしが　卯月朔日雨止晴和の日となりてやうやうに晴し
只饑に苦しみて　神幸なりも延びしもめづらかに侍し
○ある年立夏　四月十三日　ねざめて侍りし枕の上に時鳥鳴きけるもいとゞ
物めづらしかりしかば　月の曙にて初声きゝて侍りし其あした
友人のもとへ
待かねて呼かへる時鳥我たのまぬ初声なりしも
と云ておくりければ
呼びて何宿もすさめぬ時鳥きかせて今朝の一声
○蒙斎老人　岩村氏ハ質直の士にて　殊に学を講じ　道と

倫ぜし事六十餘年に及びて卯月の中比三日七十一歳に
して下世せられ致来の後ハいかしら旅づきておもくみて
行しがどもきみなきてハれもハざりしら友千鳥飛なき流
終めとなれて跡からしるしもとらぬず位とりふけ否すゞ
行とて　頂岩院心蕃又三居士

投眠世上虧盈月　笑破人間開落花
七十餘年撼下夢　故林鐘暗只鳴鴉

げふさかに思ひ侍れバきぬふまでをとづとしなしもかや
半とさて夢とのをなり行けさハただ我かげひとりつれなく
たちなくべかもおかれなりこれも亦いろまでら身にそひもろくべき
世上らきこえて泉下流るゝく播とおりてなにそれて琴をつくし
もうし

まがらしよ夢なおぶらなおぶてや世の風まつ露ふかし　橘書

○或里の隠士をとふひ侍りけるにさびしき　垣根の卯の花いと
あはれに見えしかバ

心八重さけり垣ねの葎道たえてとられぬ宿と見しや卯の花

人の遠忌とて東輪禅寺にてんぞくりのなひけ
しゆをさしかとさひおていとわすれぬすみも多かり

雨うけがあふすくれ夏に青葉をうち隔てしあくのむしとぞ聞ゆ

東福寺の観音懺ひらけくてまいりおもしけ月おもうまで

作りしと或ル人何とか利口なる事を言しければ
今年は何やらしれぬ形の夢に成てならじ物さ夢の
在とは作りけり
其時の述懐なれど一下巻とし宝生院主になりせぬ
○才勝賢きあるは無く見て下部もしらぬまゝあるき作者と見て
あまた見知らぬ人て物は何れもちりと共に一心より出る宿
諸牛の節供を見物庭の御式わきまへてしとし君あり
七夕なりしみや清少納言か筆に見る日月鶏冠に會
時天中の節として万の勝事も此日多く競闘のさかし
倭漢ごちたくし作り洛蘭汝蒲古今作人彩縷角黍

○五大官橋
都鄙弄散人不管世上の故事獨リ離騒を把て閑窓に睡ル
山城國淀 橋料秋米 五千石
同國伏見京橋料秋米 二十石
江州瀬田 橋料秋米 千石
三州吉田 橋料秋米 三千石
三州矢作 橋料秋米 壱万石
此外武州六郷の大橋今ハなし 吾妻の橋の…
みかはの橋 掛は八橋跡か名にて…
も猶とたえの橋陸奥にあり 轟の橋近江…
又京の橋とあり宇治橋和州の…
の橋和州に夢の浮橋…中なる…佐野舟橋上野

うけてのみ思ひわたるも江の橋 摂州 不通（かよは）ぬままの継橋（つぎはし）下総 又や
ちらさん八橋 三州 のくもで行水に数（かず）ならぬまの橋 遠江 浜名とよう
にき浮橋に浮世の事よらさんさてわたる長柄の橋にも
丸橋に弓橋台（こしょう）とたのみかさねたのもしにつりそそき一橋もあり
ふり年ふりし板田の橋 摂州 尾張 も許されぬめずらしのかけくし
あけてわたらんひつ川 山城 橋まづ棕橋山 和州 の雲かけて居 紀井
の御かたしるやまたれ高野（こうや）の橋 紀州 も思ひたつ君がのかけ橋
信州 やきりふる大沼の橋 伊勢 つる行せその長橋 江州 なみぞ
かくらさんとて筆をさしとどむ
橋柱かきせる人のまかこくれてこゑのかなてやまきうと

○鎮西 筑後国 宗本郷 井上山善導寺ハ本朝蓮社第二祖聖光禅
阿上人の開基にして順徳院建保五年丁巳 勅額を賜ひ
官寺となし給ひぬ浄土一流の本元九州の本寺にして
常紫衣の勝地なりけり
浄土宗教流に分（わか）れて其立義蘭菊たりされど鎮西は
一流の外なし故に吉水の正流にして大師相傳の本意に達（たつ）せ
ざるはなしかの向阿上人の三部の書ハ一流の正義を記（しる）され
つればこれをもて宗の證にし給ふ頂の義論
御つくり給ひしとぞ
○名号ハ華厳疏に召体（ヨブシン）曰名（ヲナト）表徳（スルヲトクヲ）為号（スト）名ハ別号ハ通と云へり

たとへバ弥陀釈迦等ノ呼ハ各自の体名にしてこれ別也同じく
仏と称し如来と云ハこれ通じて諸仏の表徳なるが如し
○釈氏所ノ称の居士号ハ菩薩処胎経の説に出ツ大居士の称
呼ハ大恵に見へたり 高貴と呼ブ号称也
異邦初發心の者ハ師より名づくる所の二字なり後受
具して号を授かり故又二字を重ね仍て道号戒名と連
称せり我國中世まで釈門に入る者ノも唯名のみにして
道号あることを不聞カ禅宗傳来の後道号戒諱及び居士
号等ありされバ諸宗もこれに效て四字の法名居士等と
書せしと也院号ハむかしハ天子に限り其ノ後公卿の

寺院を建し人ハ其院号を蒙りて呼し法興院殿
東二條ノ兼家公 法成寺殿 御堂関白道長公 の類也後ノ禅徒大家の人に院号
と称し殿の字を輟て書せしも是に習て世近世凡卑の
輩といへども諸宗大既院号を授て殿の字をさへ添ゆるは
妄作の至りといふべし今臨済流下の俗のみならず
院号居士号を以てせず日蓮宗ハ如きハ市井の凡下といへども
あらそひて院と称す力忌憚なきの甚しきハ只付耶
流なりけり
綸旨令旨なくして色衣を服し上人と称するの比ハ
耶祖日蓮ヶ影を紫衣に彩色せず何の代に紫と

賜ひしぞ彼徒ハまことしく利を偽ることを専らにし人を
欺他の檀越とらひ取らとのミ宗とするハ可痛
可憎嗚呼

○念ハ釈名に黏也意相親愛心黏着不能忘也と云ふと
訓ずれバ御かきにあらず釈氏念仏の念も是と以て知るべし

○林樹済縁記に云四樹已上為林独株為樹と云々

○分斉ハ正源記に分段斉限せと云つ

○友人観瀾子下世ス絶驚絶惜初七忌辰拈香

浮世可憐泡沫身　豈除去夢境煙塵
雲捲雨散暮天涙　杜宇聲々愁殺人

○今年癸巳春三月十六日より百日の間勢州朝熊ケ岳虚空
蔵大士開帳ありて参宮の次でに多く登山せり山ハ
弘法大師基とひらき給ひしにてもとハ真言求聞
持の道場なり中比以来禅院となりし此たび宗旨
の什宝ともおほし且ハ目を板よろしてひろめ侍る
そしまいらしく賂りしけるにたり黏しつゞき侍れ

伊勢朝熊嶽霊佛霊寳開帳目録

一本尊虚空藏大菩薩　明星尊天　両宝童子
一達磨大師　蘭渓和尚唐土将来　一身蛇帯王　行基御作
一大黒天　運慶作　一賓頭盧尊者　傳教御作
一明星尊天　一毘沙門天王　運慶作
一如意輪観音　天竺佛　一掌善掌悪二童子　運慶作

七福神

一虚空藏菩薩　一稲荷大明神　弘法御作
一辯才天　弘法御作　一寿老人　安阿弥作
一毘沙門天　運慶作　一大黒天　傳教御作
一恵比須　運慶作

右

一佛舎利　御長一寸三分　圓寸八分　方丈本尊　一釈迦如来　普賢菩薩　文殊菩薩　安阿弥作
一大日如来　慈覚御作　一閻浮檀金弥陀　唐作
一三寳荒神　弘法御作　一大日如来　定朝作
一阿弥陀如来　毘首羯磨作　一愛染明王　運慶作
一衣被大黒　傳教御作　一身蛇帯王　湛慶作
一不動明王　運慶作　一十三佛　定朝作
一磨利支天　傳教御作　一天神
一聖徳太子　定朝作　一當山鎮守両宮童子　聖徳太子御作

一當山開山東岳和尚像
并法衣一肩大覚禪師ヨリ傳来
一當山前任明叟和尚畫像并法衣
一文殊菩薩　光厳主筆
一釈迦如来　思恭筆
一法華経　慈覚御筆
一火除劔　稲荷御作
一金光明経　光明后宮御筆
一無量義経　慈覚御筆
一貝多羅葉
一唐磬并唐鈸
一心経　弘法御筆
一義朝公太刀
一権現様御所持碁盤并将碁盤
一合鎚劔　稲荷弘法御両作
一牛玉
一天狗爪
一駒角
一衛府太刀

勝峯山
金剛證禪寺

○南無西方極樂世界三十六萬億一十一萬九千五百同
名同號阿彌陀佛
昔釋迦牟尼佛住世行化至一俗舎見翁婆二人以
穀一斗記數念阿弥陀佛願生浄土佛言我
有異方便令汝於一聲中念得多穀之數遂
念上佛名
右佛尊號因緣諸浄土經並不見出始因唐乾
錫禪師寶王論以此佛號立一念多佛門次
侍郎王古直指浄土決疑集取之後龍舒浄土
文廣勸人受持乃曰嘗以私未穀校之一合

百千八百粒ニ若シ一タヒ稱ス此ノ號ヲ乃チ端ニ二十願穀之數

佛既ニ能ク自ラ以テ此ヲ教ユ人ニ則チ其ノ功德不可思議也切縁

寶王論不載所出ノ經論ヲ恐ハ爲缺典今恐ル稱

誦ノ者欲知故ニ茲ニ錄シ示スト云云　出ツ樂邦文類ノ一ニ

今按スルニ右ノ尊号出タリ阿弥陀佛偈ニ

後出阿弥陀佛偈　錄ニ加フ經ノ字ヲ阿弥陀經同函

同ク私記　釋良定ノ作

讃阿弥陀佛偈　曇鸞師ノ作

○

傳教大師ノ傳　一巻

叡山大師傳として題して撰者釈一乗忠と記せり是

大師の附弟に忠和尚也

慈覚大師ノ傳一巻

奥書にいふ右ノ傳ハ故寛平入道親王ノ所撰也

智證大師傳一巻

天台宗延暦寺座主圓珍ノ傳として題して撰者とし

翰林学士善清行として記せり

慈恵大師傳一巻

慈恵大僧正傳として題して書の尾に長元四年九

月九日記すと云ふ然れと撰号を闕せり或人曰覚運

僧都の草案なりし又別に慈恵大師傳として

題せる一書なり是ハ應仁三年夏五五日景範の
撰述せし所なり
右四大師ノ傳記五冊宝永改元の秋山門西塔の秀
雲上人鋟シ行ひして世よ行なへり
慈覚入寂し荼毘に殯て門人慶雲等師の龕
纔此に在なと見家議して棺を開遺体なく只下
履のこと見なし又傳云師遷化の日羽州立石寺に
入て龕中に宴坐してをれり其身内壊せんも今
尚儼然たりと云弘法德一及覚大師且越後の弘
智等全身不壊と云者亦タ一ノ奇ノ事歟

○朱子曰天地始想只有水火二者水之滓脚便成地今登高
而望群山皆為波浪之状便是水泛如此只不知因甚麼
時凝了　語類一　予そのこと摂州有馬近六甲山に登り侍りし
時なりし傳此語を誦じ侍りしがげに山の勢波の
そがごとくなりけり勢州安濃郡ふや都木とて藤堂家の領處
侍りそこに貝石山とて宮山あり其山上の石の中に石貝あり
石を破りておすかくら種々にして螺の類蛤の類あり裏
實して黒石也癸巳の仲夏或人取得来りて見せ侍り
ならされバ信濃にや文将義行云の御領の山にても石中に貝
あり乞ちてまてるりしがまあてなるハ始めて藥種

の貝石(かいせき)と一般のものあり蓋し太古此らも海中にてありしを
はん朱子が說を以て見るに海水漸は去りぞき軟泥化
して硬石と凝(こ)りしまし貝介(ばいかい)其書(うら)に含(ふく)まれ同じく化して
石となりしにや天地の不思議すぐしからず多し

貝石山石貝の状

此ら類一二にあらず

おのづから石破流(ろてるいで)もしるは淡墨色あり

巖

嵩山梅林寺　安濃郡　津より二里

柳谷(やなぎだに)村にあり寺号廬雲蔵
臨済大徳の開基にして寺家
数代経せしく迎来
茲(ここ)に盤(せり)家(こう)居をしてなりぬ
巖上の古寺は前の老樹
西浦の山風砌下(がか)の流水
皆是数景潔からして
始と住職まじりてあり

めぐる岸間流をまじへて
ふみ迷バ見えずしらして
岩の欠つらとやめ剝
うつゝと慈形容貝のかくせ

一向テ寒山ニ坐ス 淹留三十年 昨来訪ノ親友
大半入ル黄泉ニ 漸ク減ズ如シ残燭ノ 長流似タリ逝川ニ
寒山子の作也 子ハ氏も名も知る人なく古郷もさだかならず 天台の
寒巌に有りし故世に寒山子と呼ぶ 常にやぶれたる布を綴りて
衣樺の皮の冠をいたゞきたる木履をはきて國清寺の拾得
に行て喫ス菜滓の残を竹筒にいれてあづけられバこれを肩にして
去れり或ハ廊にやすらひて高く吟ずる偈むつかしげにして
杖を以て逐ハゞ手を拍て笑ふ 其毎の語も其趣あり 後に台嶺
の巌穴に入る 其穴自閉て再び人目に不触 其平日木石壁などに
多く詩を書つけ置しを世の人あつめそろへて寫し集巻
となして寒山詩と題せし 釈氏これを文殊大士の化現といへり

實に一異人なりける後世これなることを圖して床上に懸給ひ
そのうへ其清風と知らざる人に示して見せしめバ街衢の乞食ならめ
かゝる物もらひの像とこそいはまし給ふハ何事ぞや心すゞしくして
下点の塵なる事を慕へバ世たとひ人の
上に居て清げなりとも表名利に溺れて人欲に沈むなる
人とならバたれかその世とても尚めで給ふべきにまして百歳の後人これを
慕ひなんや中々憎と一世にうけ臭を千歳に残し給ふなれバ
代々の隠士人の下にありて名をだに知られざる猶多し声
利に役せられて人の上に立汚濁に砕て世に交り給はんより
豈いふにもたるべきや

○白阿師云りとこそまへの哀傷だにふるき蹤にかたどりあはす
まして平のもそなる無常さぞ数も知りがたからん夕の
哀ひとへにしるしるに惆悵びてハあれてどもたゞ明なる朝の
袂とらはする露に葉ごそいさゝかれども其の肴とはなりぬやハ
あり父子相迎ともけに恐る東岱に辭て後故人と見ざるなりと哀
しむ北芒に吟ひて毎に以土の新なる事とすもし暮春相見の
龍和尚書懐の長篇の中にて匪直詔葬不太任孔丘溫陋云フ
何之縦讒人事ノ先依頼多有言辭實不知しいふそ恥しき
なそれこそあられはさこすがあらむやこそいそぬハ名けまじくも已々
身れうべきにましてハさらにあらひとかずけなりかてなんとや

顔みてしばし一のうらてはれかさとたれり悪[?]し給ふや
あるらし人澤氏三千になふらでおこなり夢とおもしさらに
現とも覚へず甚だ父なる人乃宣へ申おかれ給りし
かれらず滅みをらハ音ずれて物事定のいくれさびしき
とまり丸けあつそらひなくされだぬ命さへはれずおもけりくハ
人の親のおもひなうりな我身にいらしさすらに年月経てハ
さおぼしまずれりに似つるかくらも給なれどさすがハ花紅葉
みつけてあしなのすぢらと云ーしかにえひあはれをてさ
たび闇にまよひ紛花ハすれ

ひきみすみなげくる甚秋の昔ふ似るる花よ紅葉よ

○或人曰世に人だまを飛てつるといふ事久し古歌なと多見え
たりすりこし書ふハおもしこ云ふ人ある荷田[?]朱文公曰リ人将死有
云魄落若氣升而散ミ語類ニと蓋しこれ人だまの飛て落し
也と説なり

○渡辺綱 多田家四天王ノ随一

○○仁明天皇─右大臣源ノ光─左少将覧─源二敦─┬刑部少輔昵
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└内舎人綱

○○河原左大臣源ノ融─河原ノ大納言昇
嵯峨天皇ノ皇子左大臣融曽孫箕田源次宛子也

武蔵ノ守仕し箕田源次充

綱老後ニ摂州河辺郡多田庄西畦野村木子か園と云フ所に住し其ノ所にして卒せり小童寺に葬ス 西畦野村

小童寺ハ満仲公此ノ御家人藤原ノ仲光か子充寿丸追福の為タメに満仲公建立開祖ハ源賢僧都 満仲公の子寿廿九也

今ハ浄土宗にして知恩院の支院也 源賢仲光充寿の石塔あり

石碑セキヒニ年ふり霜とかれて苔コケと帯ツヂて殆しれと松浦壱岐守棟 綱ノ後裔肥前ノ国平戸城主 こゝにまて其ノ古墓と見るに忍ヒずして壇ノと新タにし瑞籬ミヅガキと営し石燈籠と立テいと清キくせられ且ツ其ノ牌子なかるをなげき本山花頂ノ應誉大僧正に請コフて号と記し小童寺に安置せられし其ノ位牌ニ曰ク

春安院殿鎮西府ノ総司通事舎人源綱大居士神儀

裏書ニ曰ク

宝永七庚寅ノ天十一月日壹岐ノ国ノ守肥前平戸ノ城主源姓松浦氏従五位下壹岐ノ守棟書スレ之ヲ

綱の官職ハ小童寺の古記に随シタガフとし云

けふ子孫あるを存じず時わつてかく香火の手向ムケと新タにしまして其棟朝臣追遠の孝志いとゞあつきこともなり是ぞ永タ天下昇平の表なりけり

○根別正一位多田大権現 鎮守将軍源ノ満仲公之霊也

長徳三年八月廿七日下世葬ニ多田ノ庄ノ院ニ多田 文明四年八月十五贈ニ従二位ニ元禄九年三月廿八日 勅ノ崇ニ権現ニ同年六月九日授ニ正一位ヲ是ノ常憲院贈太相國公之執奏也

□多田院寺産五百石 公方家御朱章一山六坊配當也

南都西大寺ノ末寺にして宗ハ法相真言律三宗兼学ト云

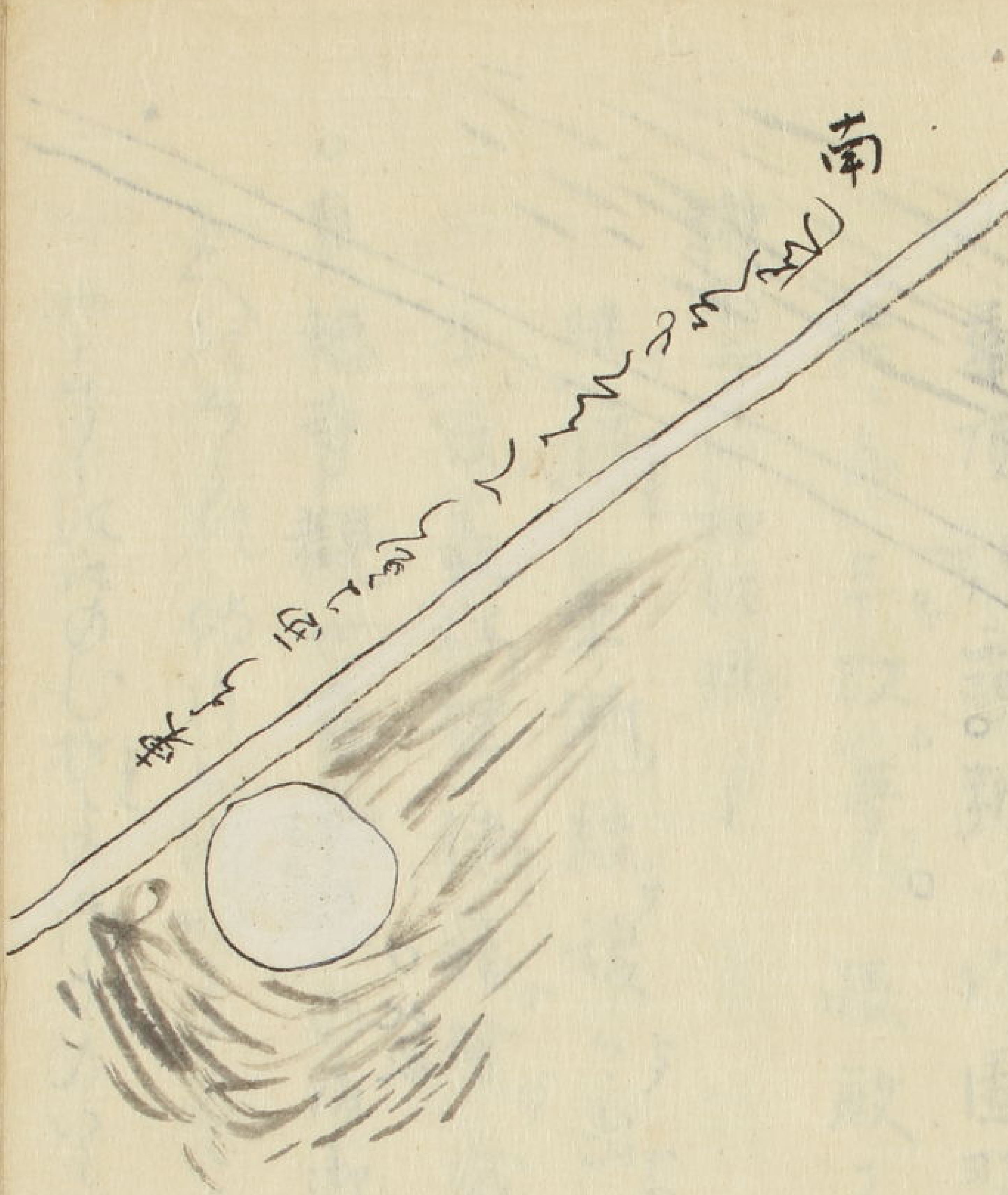
住持職ハ四天ノ奥院より轉ずしとて

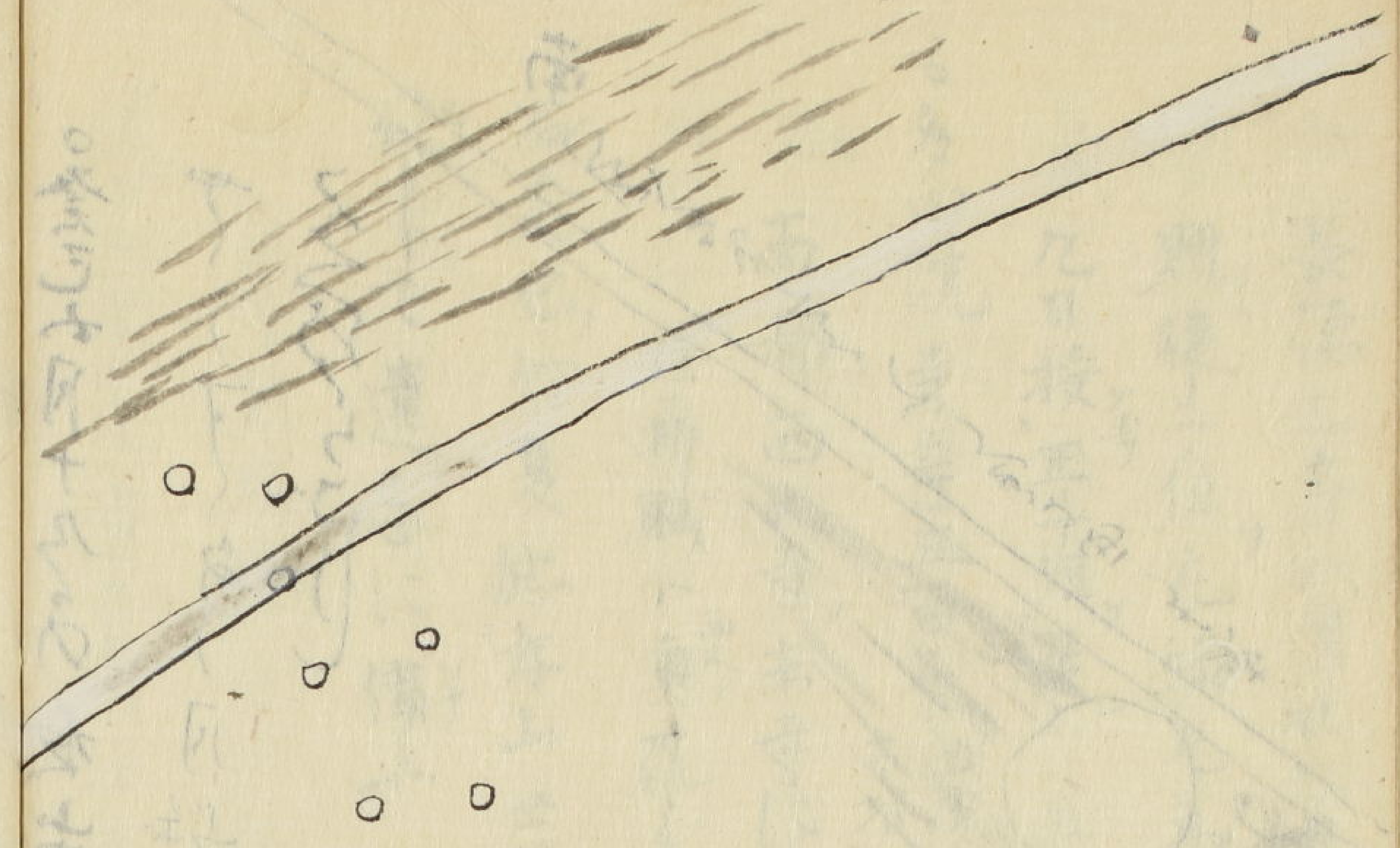
右癸巳ノ仲夏忠孝山菩提院小童寺の住持に所聞ツと父て記シルして遺忘に備ソナ上

□癸巳六月十九日の夜蚩尤旗現す戌時にて

やうすは月よりほましひかりて

見へけらずし





○北辰

又北ホ一つずあり戌の
中刻明ラカニて暗く
きく絵し
北目の夜ハ亥の時ニ東方ニ
現ず南北本ニ至りて南の
方ニ見ゆかし

○寿経光院の入道親王三回の御忌辰にある上人と請じ
一念仏[illegible]し時 五月十八日

華頂彩霞断ヘ 竹園翠霧扃（トザセリ）
流年三改夢 帳敝又残蛍

漱石子の和に曰ク

従リ伝ヘテ東漸リ 統ヲ複々出テ 皇扃ニ
今ニ寂叢林裡 徒ニ飛ブ幾歳蛍ゾ

○真福寺観世音開帳の後御おれいと院主より老母の
方へおくられ侍りし時かくしてよみつかはしける

一よのつれのむ[illegible]の御よのいとみもこえれし[illegible]ちまつて

○伊勢なる人のもとへおくりつかはしける便りにつけて文のことに
けふなむ
かれこれいさゝかなりしくさやはしくてまかりつれども会ざりける

○和ニス處舟子夏日午睡ノ韻ニ
孤園槐下ノ夢　半睡枕スル栄
蝶控幾時ノ回キ　遠ルニ辞ソ彼ノ利名ヲ

○或人六道と題して歌よみけるに餓鬼界と
まれにむすぶ水をこふれてわのわれとはいつのひなかりける

○宇賀神とて頭(カシラ)ハ老人の顔(カホ)にて躰ハ蛇(ヘビ)形に作り蛙(クヅ)をまきたる
なるを淋して社に安置し奉る前にハ一器に水を盛(モリ)彼ノ
像を入天(アマ)の真名井の水ぞといふ文を唱(トナ)へて其ノ像を浴す
像或ハ金銅又ハ磁器(ヤキモノ)なり
覆の時殿の内に御冠筥(カムリバコ)の中に彼ノ像ありし貞享御修
理の所取(リダ)出せしこれハ瑠脱(ハリヌキ)砂のいと巧(タクミ)なる作なりし
按ずるに宇賀耶ハ梵語にして白蛇と譯すされども密
家の修法にして神人(ミシミシ)修(ツ)ノ法と修せしと見ゆされども
其像密宗に製する所ハ彼ノ人首蛇身の像にハ作らず
又俵(タハラ)の上に蛇(ヘビ)を造(ツク)りこれをも宇賀神といふ
山城國稲荷の社にも此形(カタチ)あり其外の寺家にも磁器の
此ノ像納いとみちぬなり

此等中世我國の人作爲せしまゝと云ふ趣旨
又蛇首人身の像もありて修験者是を祭り
辨才天と辨財の字を書き頭上に蟠蛇を作り宇賀辨
天などいふ密家の本傳にかゝはすがるなし竹生嶋の影
像も此すぢにて世神人僧侶の謬り甚しくて始も夫と知して
作らはれたるも一二にあらず
○唐玄宗の時朝士等楊國忠に趣附し阿て官禄を求
めしを張九齢見て人に語りて曰此輩は皆向火の乞児なれば
一旦火尽て灰冷るならば必肌膚を凍裂して溝中に暴骨
すべしと天宝遺事げふと天宝の乱後楊家に諂ひ富貴を
得し輩皆蕪塗棘路に迫り裸行草食の恥を覆はざ
りし倭漢向火の乞者多し豈自省ざらんや
○賤しき身をもちて貴家と婚げ年少にして老者を凌ぎ
疎遠を以て親近を間て新を以て旧を隔て小を以て
大に加へ淫みて義を破る是を六逆と云ふ逆臣は必刑せらる
べき倭漢都てこれを竃幸して禄位威勢盛大なる多し
朝士これに阿附する輩はこれ逆賊の黨なり逆賊の富且
貴となりてもしやむ類は是國賊といふべし何ぞ朝士と云ふ
べけんや
○盧垣曰今人尺寸の禄に奔り絲毫の利に走りて海群

又蟻れ腥膻に附き衆蛾の燭火に投ずるが如し死りて醜し
とせず貪て死を避けず嗚呼恥とすて命を喪すに至り
ても猶利禄を覬取せんとす愚これより甚しきはなし
○霍諝曰り死禍を冒して以て細微を解はこれを飢哉
附子して療し渇を鴆毒に止しむるに譬て荀氏所謂
寿かゝらんことを欲して自頸を刎ていひしも亦同じ其
愚何ぞかなへて(いふ)嗚呼
○父なれ子ども子の句とふ忘にやなどたゝふれあそて
色白源氏なにがしの巻ふえしめられもこひわかれ
てひらりゆらぬ

なすとぬれゆく涼しき笹竹のそよぎふしてに秋ハなれぬ旨
○雑阿上人法師の述懐に人おもハ閑居の処とバニ野
粉河らあそびれ我身にハ暁れ秋ざめれ床に去すし
そふていなしけれも塵の世みどり窓の月さひし縁の
音かすみなん秋ざめたれハ(ヽ)すまでやハあるべき
ありひすつら浮世の旅ハれ夢なて秋ざめ去づけさとあがかられ家
松の風秋れ村雨それなしてこゝ人ともなれやその 曙
○今年癸巳四月東都深川の射場にして高瀬金沐と云ふ
十歳の童 紀工奥醫喜朴が子 孫云と云 浪人の弟子とも云 敵半堂の数矢射る 未の酉の
刻より申の時迄 矢数通計一万三千 其直発すりものれ一万一千五百

七十八矣となん　紀石これを称じまして禄二百石と
賜り中ノ石し東なる人もたおらく傍らし實ににしかれ泰山を
推し虎尾握らすざしこ三軍を助け羅を修むべき様あらん
かく奇童もなれあれバ又才徳の人豈なからざりしや